



# 丹波育児院

～辻原光治とその周辺の人々～

第10回

## 須知の前田英吉

辻原光治が洗礼を受け、須知会堂は、前田英吉が寄付した酒倉を改造したものでした。それは、「元が酒倉だっただけに両側に窓をあげ、荒壁ながら洋館のようなスタイルで、今時のような張りぼてのチヤチヤな教会に比べると柱も太く頑丈な、小じんまりした会堂」でした(船越基『開拓者と使徒たち』)。

その会堂と道路をはさんで前田家がありました。前田家は宿場町須知の本陣で、代々造り酒屋を営んでいましたが、英吉はクリスチャンになると惜しげもなく酒造業を廃し、酒倉を教会に捧げたのでした。前田英吉は、岩崎革也(一八七〇～一九四三)に影響を与えたことでも知られて

ています(芦田文司『京都丹波の岩崎革也』)。

今回は、前田英吉の波乱に満ちた生涯を辿ります。

## 氷上郡竹田から養子

英吉は、安政六年(一八五九)、氷上郡下竹田村(丹波市市島町)の依田家に生まれしました。依田家は代々湯長谷藩内藤家の代官を勤めていました。(湯長谷藩は陸奥国(福島県)の大名で、丹波にも領地がありました。映画『超高速参勤交代』はこの湯長谷藩の物語です。英吉は、明治三年(一八七〇)に一一歳で須知の叔父前田九一郎へ養子に入り、一三年、九一郎の死によって家督を継ぎました。

## 自由民権運動で活躍

明治十年代、自由民権運動は丹波にも及び、前田英吉はその中心となって活躍します。一三年、有志を集

めて「自由懇親会」を組織し、夜学「以文会」を興して地元青年に勉学読書を勧めました。一四年には「府下船井郡須知駅にて前田英吉外二十名の有志の発起にて新聞縦覧所を設け、海内数十種の新聞雑誌及び新板の翻訳書等を取り寄せ同地方の人民及び通行の旅客に縦覧せしめ」ました(『大阪日報』一四年八月三十日付け)。

五月には大阪本部から指導者城山静一を招き、豊田で八四名、須知正燈寺で八九名を集めて親睦会を開催しています。しかし、立憲政党は一七年七月、短命のうちに解散しました。

## 教会執事と禁酒運動

前田家の家計は、英吉が家督を相続する以前から悪化していました。自由民権運動にも財産を売却して運動費に充てたのでしよう。このころ岩崎藤三郎に田畑を四百円で売却しています。負債の増加により前田は「失望の余り見るもの皆憂悲の種」となり、「発狂」することを恐れて旅に出ました。その途上、京都四条教会で新島襄の説教を聞き、「恰も小川より大海に出でたる如く大いに快活」となり、キリスト教を信じるこ

とになります(前田則三「幸福之生涯」芦田前掲書より孫引き)。

明治一九年一二月、胡麻会堂で谷平吉と共に信仰試験を受け、翌年三月、船枝会堂で金森通倫より受洗します。教会の主任執事となり、妻ふゆと共に熱心に教会に尽くし、留岡牧師の招聘にも尽力しました。

二十年には明田吉五郎、芦田謙造、谷平吉、荒井嘉吉、明田重次郎の六人で「矯風会」を結成し、「品行を正し悪弊を矯め世上の模範となる」運動に取り組みました。二年の会合では「酒は百害の本」と題する演説を行っています。



前田英吉(1859~1909)

## 府議会で廃娼を建議

二十年十一月の補選で府会議員に選ばれます。府会では園部への遊郭設置に反対して「娼妓廃止」を建議しましたが、一人も賛成者がなく否決されました。

府議は短期間で辞任しました。二二年三月、辞表を提出すると、郡長は「本年の通常府会に臨まば常置委員の肩書は最早君の頭上に落ちん」と引き止めましたが、前田は「余は肩書を利用して世を瞞着する者の多きを憂ふるもの、何ぞ自ら好んでその列に入らんや」と言い放って去りました。

辞任後は須知村会議員となり学務委員や郡勸業委員などを兼ねましたが、いずれも名誉職で経済的には苦しみました。九月には一切の公職を辞してしまいます。

## 札幌で社会主義運動

二三年三月、家族と共に大阪に移住して時計商を始めましたが、うまくいきません。二五年四月には札幌に転住します。留岡幸助を頼つての渡道でした。

札幌では雑貨商や木材業などに手を染めますが、資金につまずくと田中敬造に多額の援助を受けました。田中は、前号で述べたように綾部田野から旭川へ渡り製材業で成功しました。

前田は札幌教会に属し、北海道禁酒会で活動しました。会員には竹内余所次郎がいました。二人は東京の『萬朝報』の黒岩涙香、内村鑑三、幸徳秋水、堺利彦らが結成した「理想団」に加入し、「理想団札幌支部」を結成します。三六年七月には東京から幸徳秋水を招い

て演説会を開催し、前田も弁士に立ちました。前田らの活動は幸徳と堺が起こした『平民新聞』に掲載されますが、同時期、同紙には岩崎革也の名前が「丹波須知の同志、平民社の財政援助者」(堺)としてしばしば登場します。この頃に前田と革也は数通の手紙を交わしています。

四十年五月一〇日、札幌大火災が発生します。前田宅は全焼し、営んでいた洋品雑貨店もほとんど焼失してしまいました。その二年後の四二年(一九〇九)六月五日、前田は脳溢血で死去します。四九歳でした。

船越基は、前田に多額の借金を倒された明田重次郎が「私は恨んでいません。前田君は実に立派な人格者でした」と述べていたことを

伝えています。また、「あまりにも理想主義者で、大衆より常に一步も二歩も先のことを考えていた」が、「坊ちゃん育ちの旦那衆」だったとも評しています。

前田には「貴公子の風貌あり、詩文を善くし篆刻を嗜み書画に巧み」という文人墨客の一面もありました(『船井郡人物史』)。

留岡幸助は、丹波に「追慕して止まない」三人の先輩があるとして、波多野鶴吉、井上介と共に前田を挙げています(『丹波及丹波人』)。

須知の前田家跡には、平成二年に須知財産区により「須知町役場跡」の碑が建てられ、そこには「前田英吉氏が明治二九年北海道に移住されるに際して須知村に寄贈された土地です」と刻まれています。(山下幾雄)